

今朝は食事の用意もないので
林檎を食べる
シャクツと
歯をたてると
月並みだけれど
口いっぱい
甘酸っぱい
果汁が広がり
つまり
私の口は
林檎の体液で
血まみれだ

レタスの葉をむしり
トマトを切り分ける
植物性の油をドレッシングに
パセリをふりかける
肉も魚も使わない食事
朝だけではない
昼も夜もそれで
私の食生活は
清潔そのものだ
それでも
空腹は満たされて
満たされて
死にかけて細胞が
清潔で
満たされて
レタスが私の肉になって
感情も満たされて
清潔で
トマトで
パセリで
オリーブなんかでなくていい
植物油で
清潔で
満たされて
満たされて
清潔で
私はトマトで
レタスで
オリーブでもよくて
悲しくて
それだけで
私は
清潔で
満腹で
悲しくて
私で
植物性で
それで
清潔で



illustration by Yoske

2005年 1月31日刊
発行人 中上哲夫 〒229-1103 神奈川県相模原市橋本4-11-10-408
淵上熊太郎 〒414-0002 静岡県伊東市湯川522-1

この辺りでは
道はいつも海に沿って曲がり
山裾と交わるところで
多くの失踪者を生み出している
だからといって
この静寂の中で
クラクションを鳴らすのは
時代に拘わりなく
迷惑条例に違反している
迷ったままに山に柴刈りに
老人の運転する車はそうして失踪を重ねる
子供は
溺れてしまったに違いない
海も川も森も奥は深く
先行きの表示も曖昧なところが多々ある
観念した者は
おおよそ気楽なままに
自分で死亡通知を書くことが多い
迷いのある場合は
やはり道を尋ねてしまう
誤った相手に
では
誰が正しい相手なのか
教える者もない
山陰に日が落ちるのは
思いがけず早く
それも行方知れずを生み出す
理由のひとつだろう
私も
そうして

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

芭蕉

昔のひとがなんといおうと

富士山を見た日は

気分がいい

子どものころは

（ほんの半世紀前のことさ）

富士山はどこからも見えたし

江戸時代には筑波山も見えたそうだ

最近、ロンドンから帰ったひとが

嘆いていうには

イギリスはどこもかしこも平べったくて

湖畔のレストランで食事したときは

あそこに山があったらなあ

とつくづく思った

古里の山を見て泣いた啄木や博年の気持ちは

イギリス人にはとてもわからないだろうなあ、と

きよう

海辺の町の塔にのぼったら

富士山は見えなかったけれど

遠くの丘で富士山の方をじっと見ている少年の姿があった

半世紀前のわたしのような

〈荒野の電話ボックス〉の最後

〈荒野の電話ボックス〉を最後に見たのは

ちいさな町の町はずれの埃っぽいレストランだった

テンガロンハットの男がカウンターにすわって

新聞を読んでいたのだ

荒野の埃をかぶった

傷だらけのブーツ

くたびれたワークシャツとブルージーンズ

逆光で顔はわからなかったが

ひと目でかれたとわかった

その底なしの虚無で

その恐ろしい孤独で。

窓際のテーブルでコーヒーをのんでいると

背後でがさがさ新聞の頁がこすれる音がした

窓硝子の向こうをたえずトラックが埃を巻き上げて通り過ぎた

十代の終わりのある夜

ノートブックの表面の埃の層を見て

わたしは思った

人類はやがて喉に埃をつまらせて絶滅するだろう、と

気がつく

〈荒野の電話ボックス〉がレストランのドアを

ばたんと鳴らして

外へ出る所だった

見ていると

道路を横切って

鷹とガラガラ蛇の荒野を大股で歩いていった

永遠の方へと

中田君の黄色い指

高2のクラス替えて同じクラスになった中田君の指は

黄疽患者のように黄色かった

煙草の脂で。

いつもポケットに手をつ突っ込んでいた中田君だったけど

月に一度

ポケットから手を出し

教師の前に突き出さねばならなかった

クラスメートたちと一緒に

その度に

中田君は指にヨードチンキをふりかけたつけ

ニコチン中毒に悩む中田君と

卒業後の進路に悩むぼくは

たちまち親友になった

どんな職業にもつきたくないということ

意見が一致したんだ

そして

放課後は

中田靴店の二階で

雪村いづみのレコードをきいて過ごした

とん子が歌をうたい終わると

黄色い指がピックアップをつまみあげ

何度もレコードに針を落とした

三人娘

ロカビリー・ブーム

ポップス／ジャズ／ロックンロール

そして

フォークソングの時代を通過して

チェーンスマーカーになったぼくは

煙草に火をつけるたびに思い出した

中田君の黄色い指を。

顔はどうしても思い出せないのに